

オール電化・雨月物語

青柳碧人

ヒンプリク論

1.

ドアを開くと、夜風がびゅうと吹きつけた。気づけば十月。いつまでも暑いと思っていると、風邪をひきがちな季節だ。

「サイツちゃん、大丈夫？ ふらふらしてるじゃないのよ」

「ああ、大丈夫だ」

ヤスエママに腕を取られ、岡本佐一郎はおぼつかない足取りで店を出る。《スナックやりいか》と書かれたイカ型のネオン看板に膝をぶつけてしまう。

「あ、いた！」

「ほら、気を付けてよ。部下の人と一緒に帰ったらよかったじゃない

のさ」

明日も早いですからと丸山まるやまが帰ったのはもう一時間以上前か。佐一郎は、もう一杯飲みたいと言って残ったのだった。

「ああ、いたた」

「ほら、乗って。寄り道するんじゃないわよ」

「やだあ、ママ。寄り道なんてできないわよ。呼ぶとき、サアさんの家を目的地に指定してるんだもの」

ヤスエママの後ろについて出てきたマリンが声高らかに笑った。

「そういうことできるのよねえ。タクシーなんてもう運転手がいなのが当たり前になっちゃったし。私なんてもう、そういうの疎くうとってねえ」

ヤスエママは今年、七十七になる。毎晩毎晩午前一時まで店に出ているなんて、見上げた体力だ。しかしまあ、まだまだ俺も負けてはいないぞ、と六十五になる佐一郎は無人タクシーに押し込められながら思った。

「じゃあね、ちゃんとおうちで降りるのよ」

「そればかりはサアさんでおねがい」

ばたん、とドアが閉められ、手を振るヤスエママとマリンの顔が、スモークの張られた窓の向こうで遠ざかっていく。

「ふふう……」

酒臭い息が出る。

まさか丸山のやつがあんなに酒好きだったとはと苦笑した。しかし、なかなか馬の合う社員を見つけた。二十八歳と言っていた。私も

あんな若者だったろうか、と懐古的な気分かいこてきに浸る。

佐一郎が液晶パネルの大手「マスマチ」の社長に就任して、三十年になる。先代の社長が急逝きゅうせいして引き継いだあのころは、今の丸山より少し年上の三十五歳だった。

当時、会社の経営は火の車だった。台湾の競合会社から買収をもちかけられ、大方の重役はなびいていたが、佐一郎が突っぱねた。

その頃、世界のカジノではチッププレス化が進みつつあった。さらに、マカオなどではホテルの部屋にしながらカジノのルーレットに参加できるシステムが模索されていた。佐一郎はここに目をつけ、チップを購入することなく、遠隔えんかくでルーレットに参加できる専用タッチパネルの実用化に踏み切り、アジア各国のカジノに売り込むことで業績を回復させた。

佐一郎は自分の最大の力を節約癖だと思っている。電子ルーレット用パネルは一応の成功を見せたとはいえ、それだけで今の自分があるとは考えていない。あの危機の中、五百人の従業員の首を切ることなくやりすごせたのは、社内に節約令を徹底したからだ。トイレの水の量も最少に厳守させた。照明も半分の電気代で済むようにした。待機電力を減らすため、無駄なパソコン作業を削った。自身の生活も毎日スーパーの見切り品の野菜と消費期限ぎりぎりの安いパンで空腹をしのぎ、社員にもそれを奨励しょうれいした。

その甲斐^{かい}あつて貯めた金を、開発費に回した。そして、十年前に完成したのが、家庭用3Dスクリーンである。

従来のように「画面から飛び出す」のではなく、マイコネータ粒子とQe dレーザー光の導入によって、目の前に「360度どこから見ても立体に見える」映像を映し出す——同様の研究は海外で先行されていたが、家庭用はおろか、イベント施設に設置するにしても高価すぎるものしか製造できていなかった。

大学で化学を専攻していた佐一郎は、学生時代からオンラインで公開されている世界中の科学論文を読むのが趣味である。ルーレット用パネルの需要が落ち着いてどうしようかと思っていたある日、コーヒー豆の搾^{しぼ}りかすの中にマイコネータ粒子の原料である物質と分子構造がそっくりな物質があることに気づいた。さっそく自社の研究施設にコーヒー豆の分析をさせるとこれが当たり前で、すぐにマイコネータ粒子に活用することができた。そればかりかコーヒー成分由来のマイコネータ粒子は、従来の物に比べて空気中での運動を制御しやすく、3D映像の解析度を著しく上げることが可能になったのである。

世界中で大量に捨てられているコーヒー豆の搾りかすを原料にすることで、製造コストを大幅に下げ、家庭用3Dスクリーンの実用化に成功し、《マスマチ》は3Dスクリーンの世界最大手に昇りつめ

た。

それは画期的なことだった。

あれから十年、小中学校の授業では3Dスクリーンを使った数学や歴史の授業が当たり前になり、ブライダル業界では新郎新婦のなれそめを披露宴会場の中央ステージに立体的に映し出すことが常識になり、スポーツ界ではメジャーリーグの試合をスタジアムごと縮小してリアルタイムに映し出す「パブリックミニチュアスタジアム観戦」がポピュラーになった。世界初となる全編3Dスクリーン仕様の映画「この愛の、猫の子の」がカンヌ国際映画祭でパルムドールを受賞したことも追い風となり、佐一郎はアメリカの大手経済誌の「未来を創る100人」に選ばれた。

だが、《マスミチ》が世界企業に成長した今となっても、佐一郎の儉約癖は変わらない。地元の福島県を出るのは年に数回。招かれて他所よそに行くことはあれど、自費での旅行は一切しない。風呂の水は三日に一度替えるだけ。日常のメモにはカレンダーの裏紙を使い、外食はなじみの定食屋、飲みに行くのは《スナックやりいか》と決まっている。

ケチ社長。

秘書たちに陰でそう言われていることは知っている。気にしないわけではないが、やはり儉約、貯蓄こそが一番だと佐一郎は思う。俺

のこの性格があったからこそ、コーヒー豆の搾りかすをマイコネー
タ粒子に使うなどという発想が生まれたのだから。

「だいぶ、飲んだんだね」

「ぶひゃっ！」

すぐ横で知らない声がしたので、思わず叫んでしまった。

隣に、若い女が座っていた。二十四、五歳だろうか。流れるような
黒髪の、目鼻立ちのはっきりした美人だが、目を見張るべくはその
衣装だった。

バニーガールだった。

豊満な胸からV字の股^{また}までを隠すコスチュームと、両腕のレッグ
ウォーマー、ウサギの耳をあしらった頭上のカチューシャ。すべて
が黄金色にまばゆいばかりに輝いている。あらわなデコルテから肩
にかけて、キラキラと細かい光を放ち、黒い網タイツ^{おほ}で覆われた足
が妙になまめかしい。

「な、なんだ！」

ここ数年、自動運転車の普及は目覚ましく、今や福島県内でも従
来のように人間の運転手のいるタクシーのほうが珍しい。人件費を
削ったことによる定額乗り放題プランもあり、それを社でも契約し
ている。佐一郎も酔って帰宅する日はもっぱら、無人タクシーと決
まっていた。運転手に余計な話を振られなくて済むし、速度もブレ

「キも心地よい。」

その無人タクシーに、バニーガールが乗っている！

「お水、飲むでしょ？」

彼女の差し出すグラスを反射的に受け取りつつ、

「誰なんだ？」

と佐一郎は訊ねた。

「わかってるくせに」

グラスに水を注ぎながら、バニーガールは言った。注がれた水を一気に飲む。冷たい塊かたまりが喉から胃に落ち、体中に心地よく広がっていく。佐一郎はもともと、酒が弱いほうではない。水を一杯飲めば正気を取り戻すというものだった。

過去に取引先との接待で連れていかれたキャバクラの女だろうか。目を凝らし、その顔をじーっと見たが、思い出せない。ただ……、好みの顔であることは間違いなかった。

「わからんな。どこの店の娘こだっけな？」

「店の娘じゃないよ」

「どうやって乗ってきたんだ？ 私が乗ったときにすでに乗っていたか？」

「乗っていたともいえるし、乗っていなかったともいえる」
「どうも要領を得ない。」

「おかわりは？」

「ああ、うん。頼む」

空になったグラスに、さらに彼女は水を注いでくる。

「うちはどこだ？ 送って行ってあげよう。ええと、どうやるんだつたかな」

目の前にあるタッチパネルに触れたが、どういうわけか漢字しか出てこない。しかも見たことのない変な漢字ばかりだ。中国語仕様だろうが、どうすれば日本語に戻るのかわからない。

「佐一郎さんの家まで行くわ」

唐突に、バニーガールは言った。

「そんなこと言ったってうちには妻もいるし、四十手前だったのにまだふらふらしている息子もいるし……いや、あいつは今、旅行中か」

「家上がるなんて言ってない。おうちまで、お話をしたいの、佐一郎さんと」

「話？」

訊き返しながら、この女、どうして私の名前を知ってるんだと、遅まきの疑問が浮かんでくる。

「わかるでしょ、私は佐一郎さんの大好きなモノ」

佐一郎の心臓がどくと波打った。六十を過ぎててもまだ、女性の

「大好き」という言葉には反応してしまおう。

「大好きな……って君」

「おかね」

「ん？」

「お金よ、大好きでしょ、佐一郎さん。たーくさん持ってて、できるだけ使わないようにしてる」

佐一郎はムツとした。以前、専務の東山ひがしやまに同じようなことを皮肉っぽく言われたことがあったからだだった。

「別に皮肉じゃないって」

佐一郎の心中を推しはかったように、人差し指を立てるバニーガール。

「私は、佐一郎さんが私のことを大事にしてくれるから、お話がしたいと思って来たの。私は、『お金のせい』よ」

せい、という言葉を変換するのにだいぶ時間がかかった。「森の精」や「水の精」というときに使う、妖精めいたものことらしかった。

何を馬鹿なことを、と鼻で笑うと、

「中友銀行・普通預金に二十五億六千四百二十二万三千四百五十五なかともし円、同銀行・当座預金に十三億四千二百五十二万二千円、東京三喜とうきようみつよし銀行・普通預金に六千二百二十三億……」

まるでそろばん塾の講師のように、彼女はつらつらと何かの金額

を暗唱する。聞いているうちに佐一郎は、それが自分の個人口座の残高なのだとわかってきた。正直なところ、いちいち額など覚えてはいなかったが、運用資産、証券会社、外国の銀行の名まで彼女はしつかり口にした。

「そして最後……サンタ・プエニタ銀行に六千二百ドル。以上」

「まさか！」

それは、液晶パネルに必要なリチウム鋳^{こう}の視察旅行に行ったときに作ったポリビアの銀行口座だった。優先的にリチウム鋳を社内に戻してくれるよう、会社の口座とともに個人口座をつくり、いくらか金額を入れたのだった。まさかそんな細かい口座まで指摘してるとは。

「いったい、君はなんなんだ？」

「だからお金の精。そうそう。私はまだ佐一郎さんのすべてのお金を読み上げてはいないわね。お財布の中に現金が二万六千三百十三円ある」

慌ててカバンの中から長財布を取り出す。彼女が言った金額とびつたり一致していた。

「これで信じた？」

「……うう」

窓外を眺^{なが}める。寝静まった住宅街が流れていく。まだ家に着くま

では三十分以上あるだろう。頭を冷やせ。こんなのは幻だ。悪い夢だ。

「私は嬉しい。こんなにたくさん持っているのに、全然手放そうとしないなんて」

さつきと同じ声が聞こえた。自称お金の精のバニーガールは確実に同乗している。

「そうだ、どうせ私は金を使わないケチだ。悪かったな」

「悪いなんて言っていないよ。むしろ、いくらお金を持っても威張らないその態度が素敵だと言っててるの」

威張らない、か……たしかにそれは自負している。もとより、「威張る」「偉そうにする」というのが性に合わないのだ。いつでも社員たちとフランクにしゃべりたいし、今でも雑誌を読んで思いついたアイデアを研究員たちと議論する時間は大事にしている。だから若い社員や研究員たちは佐一郎のことを親戚のおじさんくらいに思ってくれている。

「しかしだな、重役たちと来たら俺のことをケチだケチだと言う。

金をため込んで卑しいやつだというんだ」

「富めるものがどうして卑しいんだろね」バニーガールは肩をすくめた。「古来、富を手にした人っていうのは自然の摂理を見極めたり地勢の適合を判断する能力に優れていたから、自然と蓄財が可能に

なったんだよ。司馬遷しばせんの『史記』しきの中にだって、商売で成功して大金持ちになった人の記録を集めた『貨殖列伝』かしょくれつでんっていう一編がある。お金持ちはそれだけで英雄えいゆうってことだよ。あと忘れちゃいけないのは『孟子』めいしね。仕事と財産のない人間には善の心が宿らないっていう意味の格言が書かれてるよ。農民は農業、職人は手仕事、商人は商売、それぞれの生業に精を出してお金をためて国を豊かにする」

その光をはじく唇くちびるから次々と出てくる小難しい話に、佐一郎は圧倒された。

「……古い中国の話が好きなのか」

「中国の話ってか、財産の話がね。なんてったってお金の精だから」

コスチュームからはみだしそうな胸に右手を当て、彼女はウィンクをした。

「とにかく私は、お金持ちをすぐ卑しさや傲慢ごうまんさに結びつける考えが嫌なの。お金つてもともとと黄金のことよ？ 黄金って掘り出されて人間の手に渡る前から、土の中で神々しんじんしい力を放って、不浄なもの、邪悪じやあくなものを退しりぞけて、微かすかに清らかな音を立てているのよ。なんでそんなに純粹で清らかで尊いものが、卑しくて傲慢な人間のもとに集まるのか、説明してほしいわ」

だいぶ癖のある意見だが、佐一郎の心の中のどこかに、愉快ゆかいな気持ちが生えていた。ケチと言われ続けてきたが、彼女の話の聞き

ていると、金を使わず貯め込んでいることがそう非難されるべきことではないと勇気づけられるような気がする。

だが——と、また重役たちの陰口が頭をよぎる。あいつら、金持ちについてグダグダと理屈をこねていたっけ。一つその理屈を、この胸の大きなバニーガールにぶつけてみようか。

「お金の精、と呼べばいいのかな？」

「うん。なに？」

「金が神々しく素晴らしいものだという主張はわかった。だが、世の中の金持ちにはたしかに傲慢で貪欲なやつが多いのも事実だ。他社が開発した技術に『うちのやり方を盗んだ』と裁判をふっかけて多額の賠償金をせしめるだとか、政治家絡みのスキャンダルを仕組んで他社の信用を落として弱ったところを買収するだとか、汚いことをして儲けているやつらをさんざん見てきたぞ。そうかと思えば、真面目で親しいで勉強家なのに不幸続きでずーっと貧乏暮らしなんという者もいる。『金は天下の回り物』なんていうがそれにしては不公平じゃないか。清らかで尊いなら、どうして汚い人間のもとに集まり、清廉な人間に背を向けるんだ？」

「あーっと」

興奮して早口になる佐一郎の唇を、彼女は人差し指でふさいだ。

唇に当てられた指の感触に年甲斐もなく心臓がどくんとした。

「佐一郎さんは大きな勘違いをしてるなあ」

「勘違い？」

「私、お金の精は神でもなければ仏でもない。人間の善悪に応じて罰したり褒めたりなんてことはしない存在。どんな人間であっても、大事にしてくれる人のところには集まるの。『純粹』ってのはそういう意味よ」

網タイツに包まれた足を彼女は組み替える。

「佐一郎さんみたいに、素晴らしいアイデアをモノにして成功し、その後も儉約精神を忘れない人のもとにはもちろん集まる。その一方で、寝ても覚めても金金金金、隙ひまさえあれば人を騙してでも分捕ってやるうっていう人間がいたら、その人のもとにもそりや集まるっしょ。不幸続きつてのはその人の生まれ持った運命だから私の知ったことじゃないよね。集まらなくて当たり前」

「なんだか救いようのないことを言うな」

「人間を救うのはお金の役目じゃないよ。人間の行為そのもの。そのため、寄付っていう考え方があるでしょ」

「寄付……か」

耳触りがいいように聞こえるその言葉に、佐一郎はいい思い出がない。かつて慈善団体にまとまった金額を寄付したが、その団体の運営者たちが集めた金で豪遊はうゆうしていたことが明らかになったのだ。

報道によれば、当初は本当に慈善事業をしていたそうだが、集まる寄付金が大きくなってから横領おうりようするようになったということだった。以来、その手の団体を佐一郎は信用できずにいる。

「佐一郎さんは、寄付する相手の見極めは下手なんだよね」

くすりとバニーガールは笑った。

「せっかくお金を渡しても、相手がお金の愛し方を心得てなきや、無駄なんだよ」

「金の愛し方……そんなものを心得ている者は希少だ。金を持つと人間は変わってしまう。それどころか、回りの人間の目も変わってしまう」

嘆息たんそくすると、バニーガールの顔もまた曇った。

「そうだよね。お金持ちって、お金を持っていない人から羨うらやましがられるから。『羨ましがられる』って人間にとつてとても気持ちのいいことなんだよね。それで、自分は特別なんだって傲慢な気持ちが生まれる。一方、持っていない人の『羨ましい』っていう気持ちはいつしか『妬ねたみ』に変わる」

妬み。……重役や、周囲の人間からしばし自分に向けられる視線はそれに違いなかった。

いつしか佐一郎は、馬鹿馬鹿しくなっていた。

無駄遣いは自分自身を傲慢な気持ちにさせるだけだ。経営に苦し

かった頃を忘れ、豪遊にかまけては、世間の心も社員の心も離れていく。そう思っていた自分がいた。

「なぜ金を貯めて妬みを買わなきゃいけないんだ。持っけていても意味がないじゃないか。捨けてしまいたいよ」

そうだ。どうせ持っけていても使わない。豪放な遊びごうほうをすることが楽しいと思えないのだから。

「そんなこと言わないでよ。お金の愛し方を心得てるのが佐一郎さんのいいところだよ」

「なら誰かにやるか……いやダメだ。私は金をやる相手の見極めができません。息子にやる？ いや、あんなバカ息子などもつての他だ。どうすりや金をゼロにできる？」

しばらく沈黙ちんもくが流れた。

バンパーガールは膝の上で、半分ほど水の減ったペットボトルの蓋をくるくるともてあそんでいる。しばらくそうしていたあとで、佐一郎の顔を見た。

「ゼロにできないことはないけど、無駄だと思うなあ。佐一郎さんは本能的に、素晴らしいアイデアをモノにして成功しちゃう人だから」

「開発費用にしろというのか？ そんな大金を注ぐ価値のあるアイデアは、今はない」

「だとしても、お金に好かれる人だもん。すぐ集まってきちゃうよ。……試してみる？」

「試す、とは？」

「佐一郎さんの持ち金を全部、本来的な『貨幣』かへいに変えてみちやうつてこと。さつき、『お金つてもともと黄金のこと』なんて言ったけど、それは厳密げんみつには違うよね。貨幣が発明されたとき、それは黄金じゃなかったもん」

どうもこのバニーガールは、セクシーな姿をして小難こうしやくしい講釈をしたがる。

「海の地方に住んでいる人は魚、山の地方に住んでいる人は獣肉じゆうにく。初めは物々交換をしていたけれど、ある年、獣けもののほうが獲れすぎて、交換する魚が不足してしまった」

佐一郎は頭を振る。小難しいと思っていたが、どうも小学生のときに教科書に載っていた話のようだ。バニーガールは話を続ける。

「海の人たちは困って、魚の不足を補うために山の人に『あるもの』を渡して獣肉を手に入れる。その『あるもの』を、次の大漁の時に持ってきたら、必ず魚と交換してあげると約束して」

『交換する価値』を与えたわけだな

「そういうこと」

満足そうに答えるバニーガールの右の耳が、くいつ、と曲がった。

「人々はその『あるもの』を仲立ちとして商品を交換することになった。『あるもの』は小さくて軽くて長持ちしやすい。その利用によって交易範囲はどんどん広がった。『あるもの』の価値を共有する圏けん内ではどこでも好きな商品と交換できるようになった」

「貨幣——お金のはじまりだ」

「聡明な佐一郎さんならわかるよね。その『あるもの』が何だったのか——」

*

ふと気づくと佐一郎は自宅の門の前に立っていた。

《ゴリヨウ、アリガトウゴザイマシタ》

背後でいつもの無人タクシーの女性音声が開こえ、ばたんとドアが開まる。振り返るが、すでに発車した車の窓にはスモークが張られているので、中のバニーガールの姿は確認できなかった。

今のは、本当にあった出来事だろうか。

「そんなわけではないか」

佐一郎は足元を見て、苦笑する。

無人タクシーに乗ってすぐ眠ってしまったのだろう。それで、おかしな夢を見た。なかなか面白い夢ではあった。

重役たちに陰口を叩かれていることを、やっぱりどこかで気にしていたのだろう。夢の中で金というものについて考えを整理したのだ。なぜ黄金のコスチュームを着たバニーガールだったのかだけが不明だ。そんな趣味はないはずだが。

ほっ、と息をつき、我が家の全景を眺める。

親から引き継いだ、小さな平屋だ。売っても大した額にはならぬ。いおんぼろな家だが、修繕しゅうぜんを繰り返せば死ぬまで住めるだろう。

夢の中でバニーガールとの議論は、結局佐一郎にスッキリした結論を与えてはくれなかった。金を使わない自分がこんなに金を持つていても意味がない。妬みを買って煩わしいだけだ。そう思いつつも貯金をゼロにする思い切りもない。

何も変わらないのだ。これからも妙なぜいたくなどせず、この家で……と、玄関を眺めていて、妙なことに気づいた。

すりガラスの向こうが妙に白い。息子は旅行中、妻はもう眠っているはずだ。それなのに照明がついている？

いや、照明ではなかった。玄関の内側全体が、白い何かで満たされているのだ。

鍵を取り出し、施錠せじょうを解く。引き戸に手をかけ開こうとするが、びくともしない。向こうに詰まっているその重量を感じた。

「なんだこれは。おーい！」

眠っているであろう妻に声をかけたが、応答が期待できないことを頭のどこかで分かっていた。引き戸に、今度は両手をかけ、全身の体重をかけて力を込めた。

ぎし、ぎし。きしむ引き戸。ややあつて、がらりと開いた——その瞬間、

「うぐわ」

ずぎざあと雪崩なだれのように襲おそい掛かってくるそれに、佐一郎の体は仰向けに押し倒された。腹に、胸に、顎に、茶色と白のまじったそれが後から後から押し寄せてくる。

「ま、待て、待て！」

すでにそれは佐一郎の顔を覆い始めていた。このままでは窒息ちっそくしてしまい、と思ったとき、ひとまず雪崩は落ち着いた。両手を必死で動かして顔だけは外に出る。無数のそれを一つ摘まんで、眼前に持ってくる。

一センチほどの、貝殻だ。開口部が縦に長い、紡錘形ぼうすいけいの巻貝。

その名前を、佐一郎はもちろん知っていた。

「タカラガイ……」

かつて物々交換から一歩進んだ交易がはじまるとき、価値の仲立ちとして導入された、人類初の貨幣である。

無数のタカラガイに埋もれながら佐一郎は、自分のあらゆる銀行

口座の残高が、たった今、ゼロになったことを悟った。

2.

【福島産業新聞 インタビュー記事「トップランナーに聞く」】

——今回は、マスマチの代表取締役社長に就任されました丸山綺羅彦きらひこさんにお話を伺いたいと思います。よろしくお願いいたします。

丸山 よろしくお願ひします。

——まずは丸山さんの経歴についてお話いただけますか。

丸山 そんなに話すことはありません。高校を卒業してマスマチに入社したのが十八の時。五感3Dの開発チーフに抜擢はってきされたのが三十の時、それから十二年経って、今回代表取締役に就任という感じ
です。

——開発チーフからいきなり社長というのはあまり聞かない出世だ
と思うのですが。

丸山 そうかも知れません。亡くなった岡本前社長に指名されたときにはびっくりしました。

——前社長にはたいへん目をかけられていたそうですね。

丸山 そうですね。私はもともと母の影響で貧乏性のようなところ
があります。会社の給料は決して少なくないのですが、どうも社

食や近所の飲食店で食べるのが無駄に思え、白飯とおかず一品の弁当を持ってきていたんですね。普段のメモもチラシの裏なんかを使っています。電話の契約なんかも一番安いプランだし、美容室へ行くのももったいなくて自分で髪の毛を切っていました。

——徹底した儉約ですね

丸山 当然、お金は貯まっていくな一方だったんですが、あるときそのことを聞きつけた岡本前社長が私に話しかけてきたんです。前社長は「私と一緒にだ」と喜んでくださって、百万円のボーナスをくれたんです。

——それはすごい。

丸山 それも嬉しかったんですが、そのあと飲み連れて行ってくれたのも嬉しかったなあ。

——それが、チーフに抜擢されるきっかけだったんでしょうか。

丸山 いや、違うんですね。そのときすでに「5Dスクリーン」のアイデアは温めてあったのですが、現実的でないと思って社長に話さなかったのです。チーフ就任までには、もう一段階エピソードがあるんです。

——お聞かせくださいますか？

丸山 二人で飲みに行った三日後か四日後です。研究所に現れた岡本前社長は私を呼びつけ、お金を貸してくれないかと頼んできたん

です。銀行口座がゼロになったと。

——えっ？ 使い果たしてしまっただけでしょうか？

丸山 岡本前社長に限ってそんなことはありません。悪質なハツカ
ーにやられたんですかと私は訊いたんですが、ゼロになったいきさ
つは教えてくれませんでした。ただ「私は新たに試されているよう
だ」と。

——試されている？ よくわかりませんね。

丸山 よくわかりません。しかしどこもなく考え込んでいらっしや
るようなので、気晴らしになればと、軽い気持ちで「5Dスクリー
ン」の話をしたんです。すると前社長はその場で私を開発チーフに
任命したのです。

——5Dスクリーンといえば、従来の3Dに加え、匂いと味を再現
する映像技術ですが、その時点で実現のめどは立っていたのでしょ
うか。

丸山 正直、二割ぐらいでしたかね。味覚のほうは塩味だけしか再
現技術がなく、嗅覚きゆうかくに至っては匂いの粒子に変わる刺激を臭神経に
与える方法を思いついていたのですが、実際にそういうものが作れ
るか不安でした。

——そこから、試行錯誤の日々がはじまった、と。

丸山 はい。苦労に苦労を重ね、二年かかってプロトタイプを完成

させました。しかし商品化は絶望的でした。嗅覚味覚刺激電極には特殊な結晶構造の芯棒が必要なのですが、それを形成するのに莫大なコストがかかったんです。

——その障壁を取り払ったのが、やはり岡本前社長だったのですよね。

丸山 そうです。前社長は世界中の大学が発表している論文を読むのが趣味だったのですが、私の電極にタカラガイの殻に含まれる成分が使えることに気づいたのです。貝殻なんて炭酸カルシウムくらいしか獲れないと思うのが普通じゃないですか。ところがタカラガイにはFタカラニルムという独特の色素があつて、その成分を凝縮すると例の結晶構造が簡単に作れるんです。

——すごいですね。しかし商品化するには相当量のタカラガイが必要だったかと思うのですが、手に入ったんですか。

丸山 前社長はどこから大量のタカラガイを入手してきました。

——どこからですか？

丸山 入手経路の詳細はついに教えてくれませんでした。しかしとにかく、そこから十二年間、タカラガイの供給が滞^{とどま}ることはありませんでした。その間に、Fタカラニルムの人工合成技術も確立されましたので、今ではタカラガイは使っておりません。

——あらためてすごい方ですね、前社長は。

丸山 まったくです。亡くなる直前のことになりましたが、「結局、資産は銀行口座がゼロになる前の倍になってしまった」と苦笑されています。

——5Dスクリーンは今やあらゆるシーンで用いられています。マシミチは次は何を世に送り出してくるのかと世界中に注目されていますが、今後の展望は？

丸山 今のところは画期的な次世代商品の開発は行っていません。こういうときは、岡本前社長に倣い、^{なら}普段通りの儉約生活を送るだけです。お金は使うべき時期が来るまで、無駄遣いをしない。それが前社長の教えですから。

(終)